

末黒野

すぐらの

2月号 (通巻846号)



実南天

小川 玉泉

(名譽主宰)

句の道に學歷要らず実南天

廃校の表玄関照紅葉

田園の曲のファイナーレ朝の鴝

黄と紅の皇帝ダリア雪しまく

句の道に學歷要らず実南天

枯れ切つて人拒むかに菖蒲園

島裏に北風はとどかず鳶の笛

昨年の十一月には、五

十四年ぶりの大雪に見舞われた。庭の木木は雪をかぶった。翌日から晴れて、南天の真つ赤な実がひときわ映えた。中学受験の折に、おまじないに葉の九枚ついた小枝を服のポケットにしまったことを、思い出した。俳句の世界には學歷は無縁である。しかし学力は必要と、改めて思った。

時雨れけり

松本三千夫

煤けたる漱石全集文化の日
文化の日終日門を出でざりき
時雨るるや由比ヶ浜辺も大仏も
時雨忌や昨日の我を引き摺りて

猿島も艦も等しく時雨れけり
落とし物か土手に二輪の帰り花
たかしの墓時雨の島を指呼の間
山茶花の散りても命波郷の忌
城跡の木枯鬨の声かとも
菊枯れていよよ緊まれり空の蒼
雲竜の眼玉ぎろりと冬に入る
団地の灯数へるほどや枯木星

霜日和

山の端の妙に明るし神渡し
小雪や鷗が船をつれ戻る
まつすぐな声の行き交ふ冬田道
寒林を抜けて寒林鳶一羽
小春日の見事文金高島田
しぐるるや本堂奥の灯の滲み
阿弥陀堂時雨れて友の声に逢ふ
湖水満々冬紅葉亦冬紅葉
染糸の藍したたらす霜日和
郵便のきてよい時刻冬夕焼
仲見世に並ぶ新海苔絹の艶
風巻いで冬の河原の工事音

黒滝志麻子

(副主宰)

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

波郷忌

田中臥石

今年米妻仏飯を大盛りす
日帰りの湯に浸りをり櫛紅葉
柿齧る少女の皓齒日に光る
立冬の空透く玻璃戸雲走る
波郷忌の日の犇犇と花八手
鷗舞ふ冬の銚子の滲つくし
古鴉のこゑや海透く松林
冬の日や津波防止の道普請
家四五戸海へ傾く冬構へ
水面一枚剥がして飛翔鳴の陣

花すすき

森清堯

思はざる初冠雪や今朝の富士
平家池の島ひとつ占め泡立草
段葛の新装なじみ薄紅葉
ふんはりと谷戸の日を乗せ花すすき
こつと発つ宮の白鳩柳散る
箒目に浮く踏石や濃竜胆
賞状のならば鴨居や新走り
秀の揃ふからまつ黄葉朝日のせ
山巖を際立たせ色変へぬ松
蟬塚の石肌の濃く初しぐれ



溪紅葉

森清信子

腰掛けに手ごろなる石木の実降る
十六夜や雲退くる山の風
十三夜妣の記憶の途絶えがち
溪紅葉水音さへも色づきて
大岩の横たふ早瀬崖もみぢ
山頂の気ままなる風草もみぢ
岩肌を錆ぶる流れや榎櫃の実
盆栽のやうなる小島櫨紅葉
黄落や源流に手を浸しみる
潮の香のふくらむ河口鯨日和

五里霧中

安齋久英

点灯の車列山霧分けゆけり
霧ごめの峠我が身の在りどころ
夕霧の波立ち騒ぐ池塘かな
忽然と十国峠五里霧中
ヘッドライト霧の深さを探りをり
秋気満つ四角四面の白壁に
裏山の風樹こぼるる秋の蝶
露天湯に落暉ちりばめ暮の秋
穂芒や蛇笏の里もかくあらん
東雲の空紫や文化の日

柴垣

石黒興平

黄を深めかまくらの名の秋薔薇
年尾忌の墓前に佇ちて秋の声
島裏の海になだるる秋野かな
岬鼻の鳥居くつきり鯨日和
搾乳の牛の反芻雁渡し
父の忌の数珠を爪繰る秋思かな
身に入むや医の巖封の紹介状
秋声や墓碑向ひ合ふ虚子立子
ふところの滾る一瀑紅葉山
柴垣の端のほつれや神渡し



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）



鎌倉の秋

今村千年

岨道の腹切やぐら鴟猛り
江ノ電や秋色乗せて海沿ひに
鯿飛ばや実朝の海平らなる
露座仏の法衣の緩び紅葉晴
露座仏の耳朶や秋冷俄かなる
夕映えや雑木紅葉の谷戸歩き
夕映えや紅葉かつ散る谷戸の径

小六月

岡田史女

関節のこきと鳴る日や雁渡し
くつくつと煮込む鱒鮓冬隣
照り返す海光銀杏黄葉粲
零余子落つ神住む山の鎮もりに
港への人出となりぬ小六月
みな海を見てをり小春日のベンチ
木の葉散る喬樹連なる大通り

ふかし諸

岡野里子

ふかし諸考妣の近き夜なりけり
ポンプ井の台座の白木実紫
小鳥来る虚子の矢倉の名刺受
鎌倉の小路を巡り麦とろろ
一叢の萩の大揺れ小揺れかな
桜木の紅葉かつ散る一夜城
潮風の色変へぬ松紅葉忌

秋麗

加藤静江

秋うらら鳶の高舞ふ尼の寺
秋麗や乱世は遠き切通し
尼寺や秋明菊の白の寂
露坐仏のかんばせ清し菊日和
大仏の背の窓開き秋うらら
杜鵑草端然として虚子の墓
舞殿の流るる月日银杏散る

古都の秋

菅野日出子

僧坊より昼餉の匂ひ菊日和
鴉鳴くやあまりに小さき右府の墓
秋寂や釈迦堂に差す薄明り
塵一つなき参道や昼の虫
手ぶりにて道を教へぬ古都の秋
日に透けて旧家の軒の柿すだれ
一合に酔ひて饒舌新走り

柿日和

斉藤マキ子

秋天や樹齡二千の杉の矛
無人駅また無人駅柿日和
うすら寒立ち居に膝のこきと鳴り
鍬の背の均す土塊大根蒔
僧一人磴下りくる秋の暮
零余子散るもののふ駆けし切通し
横文字の野積みコンテナ雁渡し

木守柿

堺昌子

姉逝きぬ雲間がくれの十三夜
尼寺や雨に彩ます木守柿
木槿垣ひとつ咲きたる白さかな
夕照やひかりと翳の冬芒
味噌の荷に林檎三個や里の秋
無口なる弟と語らひ秋の宵
秋深む遺影の姉のなななぬか

青炎集

松本三千夫選



横浜 佐藤良二

宮城 門間とし系

柿赤し少年の日に木に登り

黄落や札所の鈴のひとしきり

ローカル線の駅に小さな菊花展

落葉踏むかまくら古道いつも濡れ

やや寒の路上ライブや客九人

麵棒に籠むる思びや走か蕎麦

横須賀 福田禎子

好日の山門明し返り花

立冬や一朵の雲の動かざる

今朝も又鳥の餌場や実千両

雲置かぬ冬三日月や鳶三羽

ハロウインの魔女繰り出だす神の留守

青空の鳶の高音や布団干す

柿吊りの梯子支ふる金婚日

翁碑に眼凝らすや初時雨

木枯の中を踏み出す万歩計

雪吊りの庭師手練の傀儡師

雪しまく遠野の里の遠明かり

切干の甘さの残る莫塵たたむ

横浜 木村弓子

赤城嶺の長き裾野や残り柿

産土の町の一望秋澄みぬ

久し振り秋日こぼるる父母の墓

故郷の川曲変はらず溪紅葉

錦織る機の町並山粧ふ

故郷てふ青春の町秋うらら

横浜 太田良一

ときどきは天剪るしぐさ松手入

わが影の二拍二礼や秋日濃し
秋うらら河童飛び出す絵筆塚
天空に隙間はあらず穴惑
潮騒の途切れとぎれや暮の秋
大根引く鍵は不要の農具小屋

大 網 白 里

画用紙に手の影はしる十三夜
蜜入れて牛乳沸かす夜寒かな
遠嶺より明けゆきにけり冬立ちて
バス通りと言へど路傍の冬芒
二歩三步戻りて仰ぐ返り花
ことごとく天を向きをり冬木の芽

亀 卦 川 菊 枝

夕照や桂黄葉の映ゆる坂
長き夜の逸話果てなき同期会
日輪のあまねき棚田豊の秋
落葉搔終へて暫しの立ち話
ままごとの縁に風なき小春かな
冬晴や紋章映ゆる勅使門

横浜 高木邦雄

一仕事してひと休み屋の虫
地歌聴く堂の百人秋扇
検査後の一喜一憂蘭香る
倒れてもなほ咲きつげる黄菊かな
過去棄つる身辺整理小六月
新蕎麦やレジに座れる招き猫

横浜 小沼ゑみ子

萩すでに色深めをり宝戒寺
腕白の今日は選挙よ運動会
切通し越えて鎌倉一遍忌
稲雀波のごとくに来て去りぬ
新走り沁むる地の味地的心
小走りに己が影追ふ枯野道

横浜 鍋 島 武 彦

人みしり覚え泣く子に秋うらら
秋冷や子の還暦をことほぎて
身に入むや子は銀髪の六十歳
祝事の余韻まぶたに秋の風
日向ぼこ妣の傍へに居る思ひ
石路の花備前の壺によく似合ふ

耕 土 集

黒滝志麻子選

平塚 尾崎千代一

大寺の秋の澄みたる婚儀かな
紅葉のなだるる池や神の山
酒旗の鮮やぐ銘や今年酒
対岸のクルーズ船や冬茜
読書灯消すや襖に妻の声

杉の木へ燃えあがりたる鳶紅葉

横 浜 峰 幸子

墨擦りて江戸文字なぞる夜長かな
御簾となる芒透かして石地藏
衣づれの静まる席や炉を開く
炉開きの釜蓋ずらす湯音かな
石段の色濃き落葉掃き残す

靴音も杉の木立も霧の中

おてんばの子のすまし顔七五三

終列車過ぐる静寂や冬銀河

木枯や街に号外まかれゐて

伊藤 武文

新倉ゆき江

酒盛りや落人村の竜田姫

朱の袱紗帯にからまる紅葉かな

ひとひらの赤と黒なる柿紅葉

単線の発車のベルや夕紅葉

柿熟れて挽ぎ手受け手の呼吸かな
老ひらくの紅葉かつ散る湯西川
解体のパスルの如く鮪切る
同窓会の恩師も丸く温め酒
奥の手を使ひ果すや花八ツ手

相模原 板谷 俊武

松橋 輝子

表札の擦れし庵や蔦かずら

先客の飛蝗のすがる手摺りかな

秋深し電車ごつこの葉の切符

銀杏や串打つ指の節樽れて
鈍色の空に色添ふ熟柿かな

霧深き木地師の里や香気満つ
朝市のごつき自然薯計り売り
為すことの遅遅と進まずとろろ汁
小春日や亀の甲羅の数珠繋ぎ
此の道も彼の路も愛づ落葉して